

第4回全体研究会

テーマ：Revisiting *Rightful Resistance in Rural China*

日時：6月26日（水）18：00～19：30

場所：大学院校舎8階・東アジア研究所共同研究室1

講師：Kevin O'Brien（カリフォルニア大学バークレー校）

司会：高橋 伸夫（慶應義塾大学）

使用言語：英語

概要：

第4回全体研究会では、UCバークレー校の東アジア研究所長（就任予定・当時）のKevin O'Brien氏を招き、中国の「ライトフル・レジスタンス（rightful resistance）」を再考した。O'Brien氏が2006年に出版した*Rightful Resistance in Rural China*への批判を踏まえ、James Scott（1985年）の指摘した「日常型の抵抗（everyday forms of resistance）」や現代中国で起こるその他のデモ行為とどのような関係にあるのかを考察した。

O'Brien氏はまず、個人の文化的・思想的要素をどのように分析するか、国家中心的になりがちな分析枠組みをどのように越えるかといった、新しい研究課題について包括的に論じた。さらにライトフル・レジスタンスの特徴として、エリート/第3勢力が関わることで暴力的な行為に展開しないこと、彼らの行動原理には信条と計算が混在しており自発的でも反応的でもあること、民主主義には関係がないことを指摘し、市民性が現れる移行期にあると位置づけた。

質疑応答においては、ライトフル・レジスタンスに関与するエリートの種類・役割について、インターネットや戸籍制度の影響について、中央政府の戦略はどのようなものか、農民が手段として選択するならばライトフル・レジスタンスはエスカレートするのではないか、といった質問が寄せられた。O'Brien氏は、ライトフル・レジスタンスはより暴力的になる傾向があり、エリートの果たす役割の重要性を強調しながらも、こうした試行錯誤が結果的には現在の体制を正統化する過程となるとの見解を示した。現代的な問題に対し、豊富な調査活動に基づく実証的なアプローチから理論の構築を図る手法には参考となる点も多く、極めて充実した研究会であった。